

新年ご挨拶

本年も、主神の大いなる愛と赦しの中で、輝かしい年の始めを迎えることができましたことに感謝し、世界中の信徒の皆様と共に、主神と、主神と共におられる明主様に、謹んで新年のご挨拶をさせていただきます。

新年あけましておめでとうございます。

さて、誠に恐れ多きことながら、私ども一人ひとりの中には、すべての源なる意識が存在いたします。

この意識は、唯一の神であられる創造主の永遠の命の意識であります。

この意識は、私どもの中に、そして、すべてのものの中に充ち満ちており、この意識によらない存在は、存在し得ないのであります。

明主様は、この意識のことを主神とお呼びになりました。

主神の創造のみ旨は、ご自身の子をお生みになることであります。

そのために、私どもの中におられる主神は、すべての創造をお始めになる前に、まず、ご自身の天国を用意され、その天国において、万物の霊と共に、人間となるべき霊、すなわち、ご自身の^{わけみたま}分霊を、予めお生みになりました。

この時、主神によってすべての分霊に刻み込まれた名前がメシアである、と私は信じております。

主神は、ご自身の天国を通して万物を創造されるとともに、万物をお使いになって、私ども分霊を個々別々の自我意識を持つ人間として創造されました。

主神が個々別々の自我意識を持つ人間を創造されたのは、万物と一体である私ども一人ひとりを再び天国に迎え入れ、主神のみ業を継承し、主神に仕える者、すなわち、主神ご自身の子・メシアとして新しく生まれさせるためです。

しかも、私どもの中におられる主神は、ご自身の創造のみ業をすでに天国において成し遂げておられるのです。

しかしながら、私どもは、主神が私どもの中におられるにも拘らず、主神をないがしろにし、主神の意識を自分の意識とし、その意識を自分の都合のよい善悪の尺度として使っておりました。

そうした私どもを主神は赦してくださいました。

なぜならば、主神は、私どもをご自身の子・メシアとするという愛のうちに、私どもを赦されたもの、救われたものとしてくださったからです。

私どもの中には、主神の愛があるのです。赦しがあるのです。メシアとい

う御名が刻み込まれているのです。

そして、私どもは今、主神の子として新しく生まれるために養育されているのです。

ですから、私どもは、メシアの御名があればこそ、赦され、救われたものとされていることを思い出し、悔い改め、心を開いて自らのうちに刻まれているメシアの御名を、改めてお受けさせていただかなければならないと思います。

このように、メシアという御名は、主神にとって大切な御名だからこそ、私どもにとって大切な御名なのです。

明主様は、昭和10（1935）年のご立教以来、「観世音菩薩（観音）」を始め、「弥勒（五六七、日月地、ミロク）」、あるいは、「伊都能売（いつのめ）」等の御名と共に、「メシア」という御名を大切にしてくられました。

そして、幾多の変遷と推移を経て、明主様が昭和25年2月4日に「開教」された教団の名称は、「世界救世(メシヤ)教」であります。

この頃、ご発表になられたお歌に、

「抜きも差しもならぬ此世にメシヤ教出でずば未来は如何になるらむ」というお歌があります。

そして、明主様ご自身の「明主」というお名前について、「明主の言霊は、メシヤと五十歩、百歩だから、あるいはメシヤの名前になるかも知れないとも想っている」とお述べになり、私ども信徒が「明主様」とお呼び申し上げるのもこの頃からです。

また、同じ頃、明主様は、当初お作りになった『善言讃詞』の冒頭の「世尊観世音菩薩此土に天降らせ給ひ光明如来と現じ 応身弥勒と化し」のあと、「救世主とならせ」と書き加えられ、最後の御名を「メシヤ」とされました。

「メシヤ」と題する一連のお歌もお詠みになりました。

例えば、

「畏くも大慈大悲の観世音菩薩はメシヤの御名になりませり」

「観音の衣をかなぐり捨て給ひメシヤと生るる大いなる時」

「観世音菩薩の御名を揚棄させメシヤの御名に世ぞ救ふなり」

「大救主の御名は最後の世を救ふ尊き御名なり心せよかし」

などのお歌があります。

このように、明主様は、観世音菩薩（観音）の本体であり実体がメシアであることをお示しく下さいました。

私は、明主様にとりまして、「観世音菩薩」という御名を始めとする数々

の御名は、今や、「メシア」という御名に包含され、融合されていると思います。

また、明主様は、ご昇天の前年の昭和29（1954）年の4月、脳溢血の症状を起こして倒れられましたが、このことを「御神業として非常に神秘的な事」と仰せになり、ご自身の中で「メシヤが生まれた」ことを「新しく生まれる」というお言葉をもってご発表になりました。

そして、6月15日、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行され、主神の子として新しく生まれるという、例えようもない喜びがあることを私どもにお示しく下さいました。

このメシアとして新しくお生まれになった明主様が、私ども一人ひとりの中におられるのです。

その明主様が今、私どもの中で、“わたしを模範とするように、と訴えていらっしゃるように思えてなりません。

そのためにも、私どもが大切にしなければならないのは、ご立教当初の明主様のお言葉です。

明主様は、昭和10（1935）年のご立教後、機関紙としての新聞「東方の光」と共に、雑誌「光明世界」を発刊されましたが、その創刊号の巻頭言には、次のようなお言葉が記されております。

神は光にして光のあるところ
平和と幸福と歓喜あり
無明暗黒には
闘争と欠乏と病あり
光と栄えを欲する者は来れ
来りて――
観世音菩薩の御名を
奉称せよ
さらば救はれん

このように、明主様は、「観世音菩薩の御名を奉称せよ さらば救はれん」というお言葉をもって、この巻頭言を結んでおられます。

しかしながら、私どもは今、メシアがこの観世音菩薩の本体であり実体であることをお示しいただいているのですから、この巻頭言のお言葉は、主神が私どもに対し、

メシアの御名を奉称せよ さらば救はれん

と命じておられるお言葉として受けとめさせていただく必要があるのではないのでしょうか。

そして、主神の子として新しく生まれるために、明主様と共にあるメシアの御名にあって、天国に立ち返らせていただかなければならないのではないのでしょうか。

私は、明主様が天国を地上に造る、あるいは、天国を地上に写すとお説きになった真の意味は、私どもが自らの中で、地上という世界が天国という世界の中にあることを認め、その天国に立ち返らせていただくことであると信じております。

私どもは、明主様と共にあるメシアの御名があればこそ、赦され、救われたものとして、主神にお仕えさせていただけるという、全く新しい信仰に目覚めさせていただきましょう。

そして、全人類をご自身の子とするというみ旨を私ども一人ひとりの中で成し遂げておられる主神を、父母先祖の方々と共に、また、天地万物一切と共に、心からお讃えさせていただきましょう。

ありがとうございました。

以上